在宅医療における基本的な対応方法・相談の目安

　　　**どういう場合に病院に連絡するかなど、支援関係者の参考資料として御利用ください。**

**利用に当たっては、必ず主治医の先生に確認してください。**

考え方　：　施設と病院は違う。＝必要以上の医療行為は行わない（行えない）。

医療を求めるなら病院へ。

自然な形での最期を求めるなら、看る側が慌てないことが大事。

|  |  |
| --- | --- |
| 確認項目 | 状態・対応 |
| 排尿 | 12時間以上出ないとき（水分が少なければ自尿も出ないのは当然）※ただし、排尿がないからと水分を摂らせ過ぎれば、浮腫悪化・心臓への負担が大きくなる。→　主治医へ予め飲水料を確認しておくこと。 |
| 排便 | ２～３日おきに出る（硬い）・下痢をする・出血がある。 |
| 食事 | 全く摂れない、摂らない状態が２食続いたとき※代わりに、栄養補助食品（エンシュア等）が摂れていればよい。 |
| 水分摂取 | １日トータル飲水量が500ｍｌ以下（むせ込んで摂れない・欲しがらない等） |
| 血圧(高値) | 頭部を少し高くし、30分後に再検査。それでも170ｍｍＨｇ以上なら医師に報告。 |
| 血圧(低値) | まずはベッド臥床、リクライニングを倒す、下肢挙上等で対応。※暫くして再検査し、落ち着けばいいが、低い日が多くなった等あれば医師へ報告。※薬の変更などのため、水分量が少ないと低血圧になるので、脱水予防は必要。 |
| 体温 | 37.5℃以上の熱で、冷却しても下がらないとき※微熱（37℃台前半）が数日続くときは、医師へ報告。※発熱時、３点クーリングをすることがあるが、熱の出始めは悪寒が来ることもあるため、冷やし過ぎてはいけない。※末梢が冷えていたり、悪寒がある場合は、まずは保温する。 |
| 脈 | １分間に120回以上又は40回以下 |
| 酸素飽和度(ＳｐＯ２) | 92％以下が続くとき※末梢が冷えていたり、動かすときちんとした値が出ないので、一番いい値が出る指を探す。 |

おおまかな目安を掲載していますが、いつもと違うと思えば情報を把握し、手元に介護記録・検温表などを準備して、落ち着いて下記に御報告ください。

医療機関名：

電話番号：

看取り期の患者の状態

心停止・呼吸停止になるまでに起こりうる事をまとめました。

一般的な流れであり、全てではありません。

お別れまでこの状態がどれだけ続くかは各々です。

声かけに反応されなくても、耳は最期まで聞こえていると言われますので、

たくさん話しかけてください。

※患者様の前で、マイナスな会話は気を付けてください。

○うとうと寝ている時間が多くなるが、声かけには開眼される。

○食事・水分摂取が減ってくる。

→　全く摂れなくなる。

○飲み込みが悪くなる。痰がらみの音が喉のあたりでする。

→　喀痰吸引（奥までしなくてよい）

○尿量が減ってくる。濃い色が出る。

○熱が出始める。

○血圧が低い日が多くなる。

→　電子血圧計では測れなくなる。

○酸素飽和度が低くなってくる。

→　酸素吸入しても上がらなくなる。

○手足・足先が冷たくなる

→　チアノーゼ（パルスオキシメーターではきちんと測定できない。）

○呼吸状態が変わってくる。

→　大きな息をしたり、数秒間止まったりする（無呼吸）。肩で息をする。

《末期癌の症状・終末期の身体》

○末期癌とは

癌が全身に広がり、積極的な治療がなくなった場合の患者さんを末期癌患者と称する。癌は進行の具合により初期癌、早期癌、進行癌、末期癌の４つの分類に分けられる。（ステージとは異なる。）

末期癌の種類によって、病状が悪化する速度、いわゆる進行速度は異なる。

【症状】

１　痩せる

食欲が落ち、水分を摂るのもやっとな状態、顔付きが変わる。筋力が衰え歩けなくなる。

２　むくみ、腹水、胸水

・体内の水分調整がうまくいかなくなり、手足がむくむ。

・腹水や胸水を抜き取ってもすぐに溜まってしまう。

・胸水が多くなれば肺が膨らむスペースが減り、息が苦しくなる。

・腹水が溜まれば、お腹が張った感じが強くなり、少しの水分、食事しか摂れなくなる。

・手足の浮腫が強くなると、手や足が重たく感じ、動くたびに息苦しくなる。

また、皮膚が張って、痛みを伴うこともある。

※　浮腫が出てきた段階で、癌が進行していることを受け止める必要がある。

３　血圧低下

心臓などの循環器の働きが弱まることにより、血圧が低下してくる。心臓のポンプ機能が低下し、腎臓に送る血液の量が減ると肝不全状態になり、意味不明な言動をしたり、眠る時間が長くなっていったりする。

【痛み・緩和ケア】

・癌が神経を圧迫し、痛みが発生する。モルヒネなどを投与し、痛みをコントロールしていく。

・痛みが起こってから薬を使うのではなく、痛みが起こらないように早めに使う。

・量がどんなに増えていっても痛みをうまくコントロールすることは必要。

・副作用（便秘・幻覚など）についても注意深くコントロールする。

○　発熱

・感染症にかかりやすくなる。

・癌による腫瘍熱も考えられる。

○　下血

・消化管からの出血を意味するが、癌本体や転移した癌細胞からの出血もある。

癌という病気だけではなく、高齢者はいつでも急変する可能性があるということを念頭に入れておかなければなりません。

徐々に衰えていかれる患者さん（利用者さん）を見守っている御家族、スタッフもつらいと思います。しかし、スタッフができることは、**患者さんの様子（変化）を主治医に簡潔に伝える**ことで、それが患者さんの手助けになると思います。

在宅医療ではチームワークが大切です。

これからもうまく連携していけるよう、お互いに頑張りましょう。